遞信省認可

いらつめ第四十六號目次（明治廿三年三月廿五日）

●家政…裁縫獨學び（第十三）……木下貞子

六尺を以て中だち股引裁縫法＝大巾フランネルのシャツの裁方＝並巾フランネルのシャツの裁方＝並巾を以ての中裁小供袴裁方＝並巾の馬乗袴裁方＝袷袴の裏の裁方

○女子の望み……さゝ子

○土瓶鉄瓶の湯垢を去る簡法

●文藝美術…處女の愛情（和歌二十首、文章四篇）

○桃花（和歌歌曲）

○春興（韻文）……撫箏女史

○世のさま（韻文）……掬月散史

○星（譯韻文）……朧月

○月瀬に梅を見る……笹川はる子

●寄書…江湖の淑女諸君に望む……香圃女史

○談話について……槐月陰史

●脚本…花兄弟二枝梅香……立花家蕭

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（九日十日二十四日廿五日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り増しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し

從第三十八號至第四十七號十部版權所有

明治二十三年三月廿四日印刷

明治二十三年三月廿五日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には種々の優美な文藝　次號には萏の花●數學談花顔玉手秘事其他の面白い事が出て居ます

●本號にも前號の通り純子表紙を付ける筈の處少く遞送に不都合が有り止を得ず今回だけ無表紙にした段は容赦を願ひます

いらつめ第四十六號

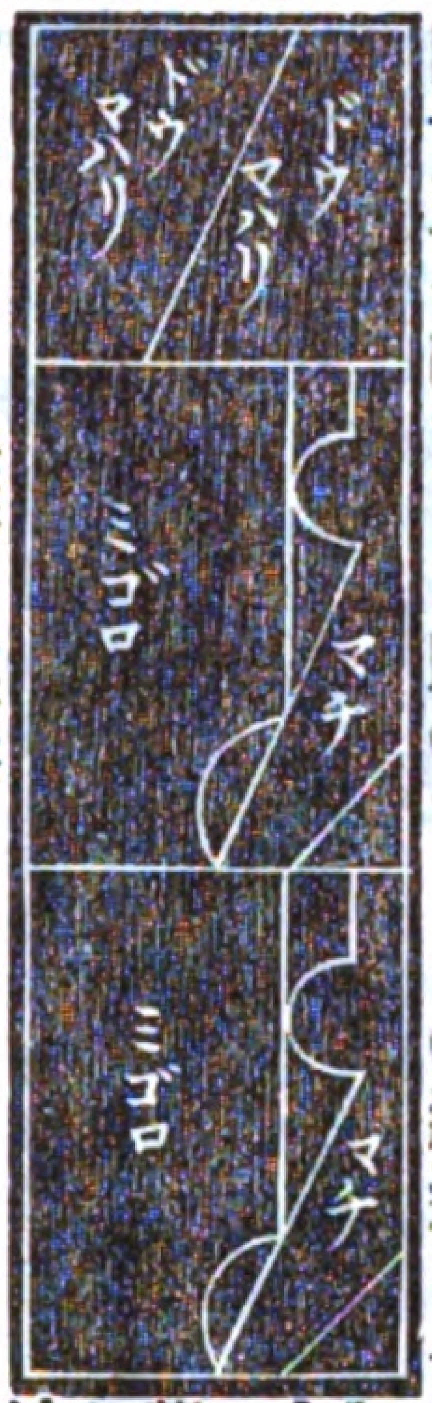
家政

裁縫獨學び(第十三)

六尺を以て中裁股引の裁縫法

本下貞子

丈け二尺一寸胴廻し一尺七寸五分を斜めにたち身頃となる切地から襠をとり身頃の上巾を七寸にし下のせまいところを四寸五分にたち身頃のところの邊迄を一尺四寸四分とし其の余り切地をほど能く落すのです。但し紐地ハ別に切地二尺程

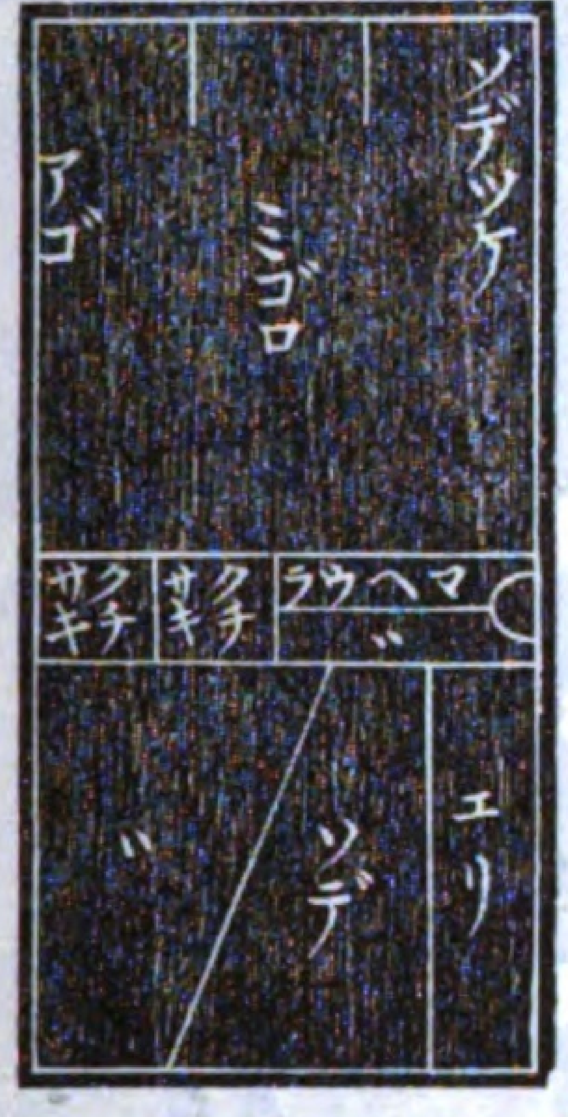


入用です。又巾は大凡一寸八分です。

股引を縫ひますにハ最初に襠を拵らへそれから口縫をし外襠からさきへぬひ終つて内襠をぬふのです。次に胴廻の廣い方を襠の方へ縫ひ付け狹い方を身頃の方へつけるのです。それから胴廻の狹い處を五六寸一處にし紐ハ右の方を長く左の方を短かくしてぬひつけ次に裾の口先から三寸上から針目を斜にして裏表一處にぬひそして紐を絎け付けるのです。

通常の大巾フラ子ル二ヤード半を以てシャツの裁方

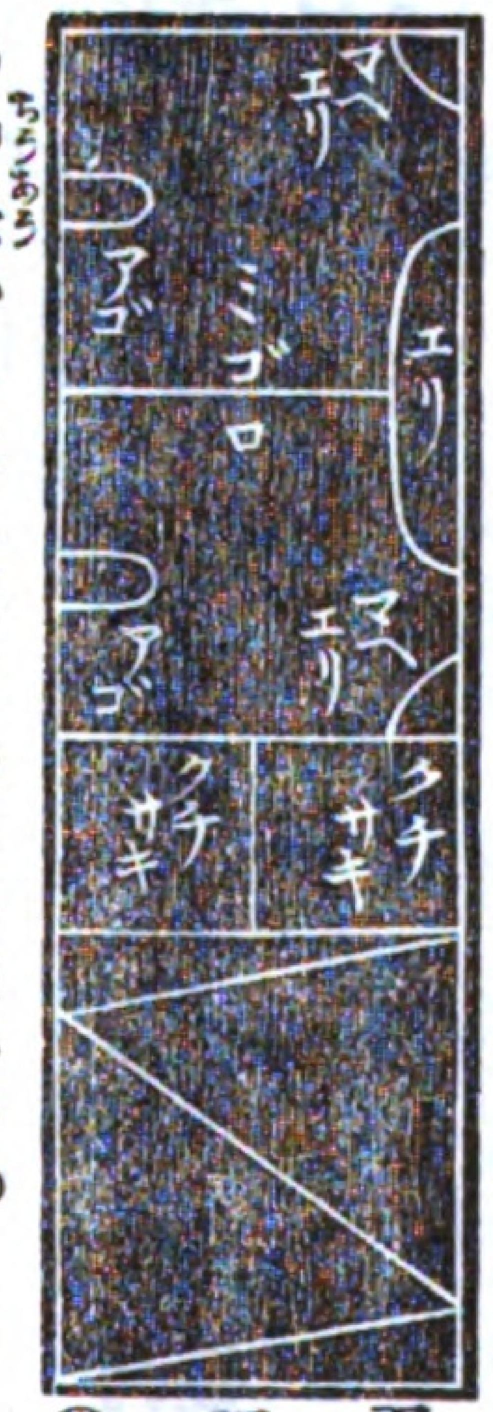
丈け一尺九寸袖丈け一尺三寸五分口先き巾六寸丈け四寸襟



丈け一尺二寸五分袖口一尺廣い處即はち袖附け一尺二寸襟巾二寸襟肩二寸三分腮二寸二分です。

五ヤード即ち常巾一丈二尺を以てシャツの裁方

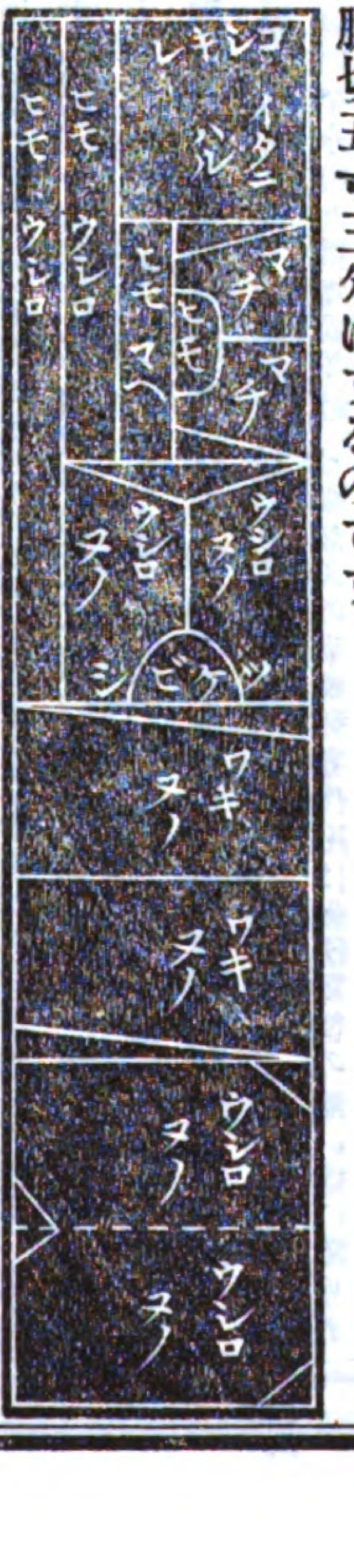
丈け二尺三寸身頃の巾七寸袖口四寸袖六寸袖丈け一尺三寸五分口先きの巾六寸五分余又前裏は身頃の端から取り襟も身



の中央からたちわとしとるのです。

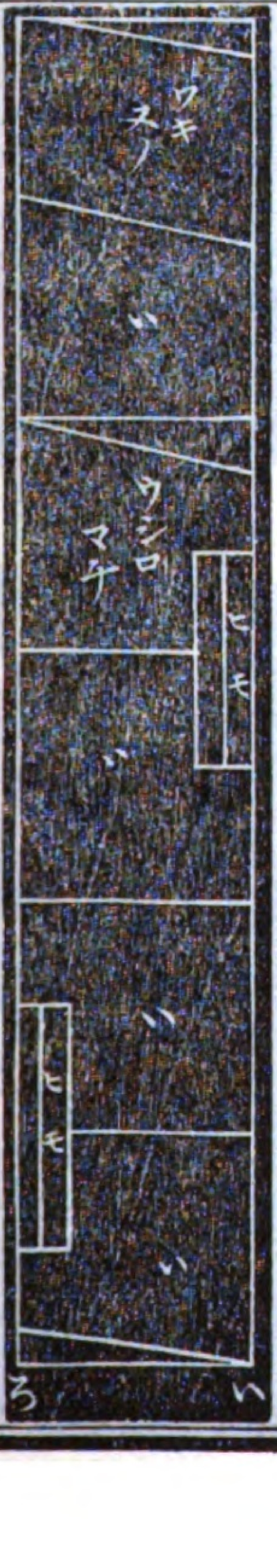
常巾丈け一丈三尺を以て中裁即ち十才位から十五才迄の小供の袴の裁方

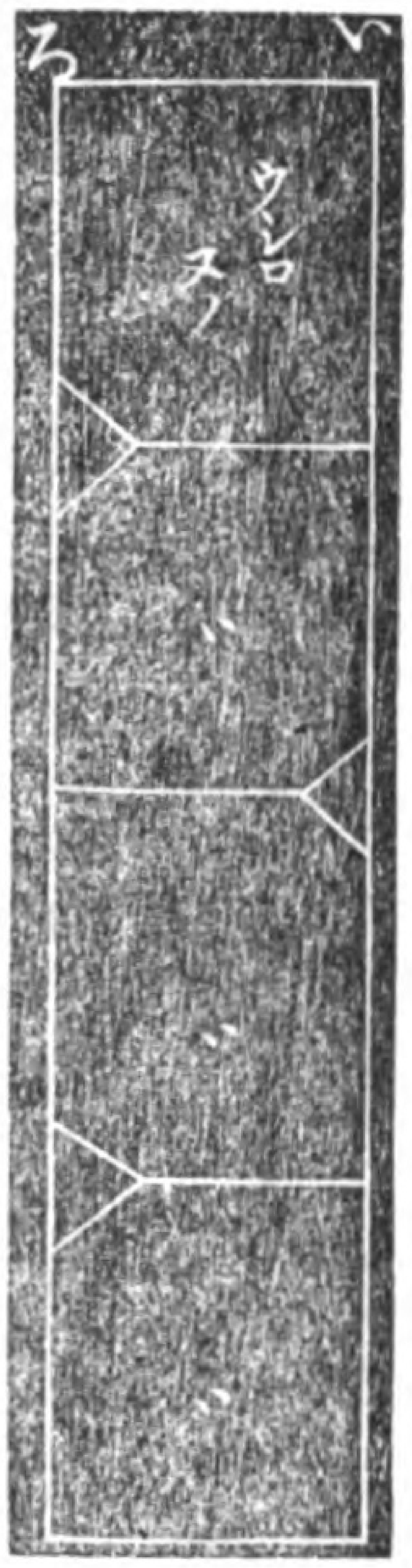
後襠の長一尺七寸五分に一尺七寸前襠の長さも一尺七寸五分に一尺七寸にし後丈と一尺八寸腰板の巾四寸五分襠の高さ八寸五分相引八分五寸後紐一尺六寸前紐七尺五寸巾一寸五分腰切五寸三分にするのです。



常巾長四丈五尺を以て馬乘袴裁方

後布丈二尺四寸後襠二尺三寸八分脇布丈二尺三寸三分に二尺四寸後襠の　落したところの巾は二尺二寸四分です





袷袴を縫ひますには最初紙を一分位に巾をたちまして投になる所へ少しく糊を付けましてはりつけそれを乾かして表を大凡一分位も去つて縫ひ引きくり返して裏を五厘程も去つてそれから躾糸をかけうして裏と表と縫付け後襠も亦縫ひ付け次に後の方の裾口をぬひ次に裏も表もはきつけ又脇縫奥布もいぎつけるのです、そして前襠をぬひつけ次に裾口をもぬひこれから相引を四枚共にぬひ中間の方から二枚づゝぬひ次に四枚を一處にぬふのです。

袷袴の裏の縫方

袷袴の裏をたちますには先づ表から五分許り結めてたつのです。裾口を表とよくあふやうにそろへて裾も表から五分許去り挟を程よく挟落し次に表の方の後襠とたち又それを五分程つめて裏をたち裾は表とそろへてたち又裾口を五分許り去り襠の高さをきめ又上の巾をはかり五寸にして殘りは挟落してしまうのです又脇縫をも表より裏を五分つめて裁ち次に奥布を表より之れも五分結めて裁ち又前襠を表より五分つめ裏をたち裾口をば裏を五分去つて襠の高さをあたり表の通りに挟落すのです。

女子の望み

さと子

女子を學校にやるのもいゝ、學校へやつたところで無上に氣が高くなられて困るとは今の世の人が往々言ふ言葉です。われ〳〵は其言葉の當否は知りません、また多數の女學生殘らずがすべて斯うとも思ひません。　が、世の人が言ふこのやうに言葉が一概に根の無いことゝも思ひません。

昨日まで同じ學校に居て同じ教師に叱られた仲間の朋友が今日は退校して嫁ぐ、その嫁ぎさきは何處かと見れば天晴な中等以上の社會、肥馬輕裘もとより望みの儘の地位、これを傍觀してやがて自分がこれより低いところへ行かうと誰も望む事の無いのは人情です。　たゞこの人情、それがために自然氣位を高くするやうにもなる、それも更々無理も無い事、既に生きて居る以上は虫介とても慾は有ります。

只慾を此處に注いで、それで境遇と道理とを考へて其慾を節しさへ出來れば宜しいです。　成程朋友は貴顯の許にかたづいた、それは羨ましいにしろ、婦人が稟けた天命は必しもそれら輕肥を俟たずとも盡くせるといふ高尚な考へ、その考へと養成して、むしろ羨むと言へとも羨んで騒がぬやうにすれば何の咎める處も無いのです。　斯う言ふと情を解せぬ令

淡るもの〻言葉にも似ますが、道理は實にさうです。　夫を助けて一家を和樂におくるといふ妻の本分を思へばよしや嫁く先きはそれ程の高家で無いにしろ、妻となつてから後運動すべき、樂しい地面が澤山にあります。　かならずしも氣ぐらゐをのみ高くしたとて始まらぬ事、一般の女子がむしろ完美の細君、完全の母親となるのをのみ望まれるならばいづれ行くさきもひとり高家にのみ限ることとでも無い譯です。　が不幸にして今日中以上の社會が世に勢力の有るのを見聞する常として女學校も多くは氣ぐらゐを高くのみさせる（間接に）科目を設けても有る事、たゞ之について考へるべきは女子諸君のその胸中にある事です。　あるところで近頃一つならず三四種まで前述べたやうな事が實際に有つた、それを聞き込んだまゝ斯うつらねました。

土瓶鐵瓶の湯垢を去る簡法

通常の曹達すこしばかりを土瓶か鐵瓶に入れ、水を入れ、火にかけて沸にたゝせ、其まゝ二十四時間捨て置き、その後清水であとをよく洗へば全く湯垢は無くなります。

文藝美術

第十二回懸賞文藝應募得點（前號のつゞき）

題　處女の愛情

○和歌

たらちねのねものがたりの人をしも
戀ひそめにける花のいろかな…………花のやまゆみ（イハキ）

まなびやにとひつどはれしおもかげを
思ひいでつゝなつかしきかな…………同　上

右評　以上二首處女の愛情の一部分だけしか寫してありません。

咲きにほふ花にしあらばをとめ子の
色にめでつゝ手折らんものを…………目時きぬ子（テイゴ）

右評　少女子が主にならず外部の男子が主になッてそして一點も處女の愛情の意が籠りません。

うるはしきいろ香のみかは實をむすぶ
すゑたのもしき花のをとめ子…………同　上

右評　優な歌ですが、素より題には適しません。

いろもかも目には見ゑねどをとめ子の
心の花をしる人ぞしる…………同　上

右評　なし。

うるはしきふりわけがみのをとめ子が
長きちぎりを誰にむすばん…………(同　上)

右評　乙女といふだけの題意です。

すみれつむ里のをとめの聲にだに
むらさき深きいろをみるかな…………桂薌小史(トウケイ)

右評　紫ハすみれに掛けたのでしやうがまだ聲とのかゝりが現れません。

つゆだにも世のうき事は知らぬ身の
をとめごゝろがゆかしかりける…………細谷子誠(ヒゼン)

右評　やはり乙女といふだけの題意です。

そよと吹くのどけき風に氷とけて
池のさゞなみたちそめにけり…………鋤雲山人(ヒダ)

右評　愛情よりはむしろ處女の春氣を述べた作です。

以上九首無賞

はづかしとおはへるそでにこもるらむ
ものおもはする戀ひのはつかぜ…………小堀蛙鳴(ウゴ)

右評　しらべはよくも有りませんが題意によほど近く出來ました。

をとめ子のこゝろの程は顔にちる
紅葉のいろに見るべかりけり…………石川のぶ子(ミカハ)

おもへどもにこそ言はれねその口ハ
まだ口なしのいろのをとめ子…………同　上

右評　前の歌かろく叙べたのが却ッて情になりました。後の歌、酷く言へば、淸少納言の口吻、たくみは巧ですが、すこし才氣があふれ過ぎました。

以上三首いらつめ一部

時はまだ冬とのみこそ思ひしか
ゆきの下よりもゆるねわかくさ…………石川のぶ子(ミカハ)

右評　處女の物ごゝろの人の知らぬ間につくのを巧に述べられましたが、しかし「愛情」といふその「愛」の意味ハ具足して居ません。

人けなき時とし言へどおもふ君が
名をよぶことのはづかしきかな…………同　上

右評　處女の情は溢れて居ますが、矢張り「愛情」といふ處までは言ひ及びません。

花の香はつぼみのころもありなまし
をとめごゝろのうちがゆかしき…………神谷文子(ビンゴ)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

きのふまで雪と見しまにうめの花
あやしやいつかにほひそめけむ……永島芳子（チウリ）
ますらをのこゝろの底やいかならむ
きみがなさけのつゆをうけては……岡本皎子（トウケイ）
花鳥のあはれもまして思ふかな
ふりわけがみのいはけなき身も……原田芳五郎（トウケイ）

れほどよに花のありかは知らねども
ゆかしくうめのにほひけるかな 木原花太（トウケイ）
をとめ子のこゝろをものによそへなば
かきねにかをるうめのはつはな 目時きぬ子（イハデ）

以上八首第三等賞

（イ）　紅雨女史（ウシゴメ）

其姿の優しさは、野邊の流に影を見せ、微風に靡く柳の絲。其色香の薫しさは、昇る旭に顔を上げ、笑める櫻にも優る。雲の鬢、霞の眉、清き朝露を含みし紅蓮の頬、愛の泉は滴るばかり。が顔は心の鏡、胸の憂は眉の根に。愛らしき瞳を凝らし、目的なしにあたりを見廻し端なく眼に觸れしは、纖手に輝く黃金の指環。飾の石より堅く契りし彼の君、今は何處に、思へば小さき胸も張り裂くばかり。書を繙くも夢うつゝ、綴りし文字は君の姓名？ 筆の運びもあちこち、倘は書く歌は君の事。君の賜ひし玉章、物思の種とは知りつゝも、卷きつ拔きつ日に幾度、淚の痕も眞砂の數。いつぞやの夕、手を握りつ堅く誓ひし言の葉。今も倘は耳底に。情に濕ふ晴湖の鴛鴦、樂しさは如何ばかり。荒波起たばよし岩礁に碎くるとも、野嵐吹かばよし盛の花を散らすとも、生命を救ふに生命……、噫、思ひ出すも紅葉は顔に散る。

蜜に眠る蜂蝶夢央ならざるに春風盡くるを恨み、露に咽ぶ蟋蟀吟じ足らざるに秋の霜嚴きを喞つ。君は官命もだし難く、今は天涯萬里の外。豐浦の佐世姫思ひやらる。歌ひ涌き笑ひ崩るゝ宴の席にも、心はたどる君の傍。月の光を納め雲の床に眠る夕も君がパリの花に醉ひ、ベルリンの月に吟ずるを夢む。蕾の花を馨らせし風、今は膚を切る。清らかな月を宿せし波、今は身を打つ。「さきの世の契しらるゝ身のうさに行末かねて賴みがたさよ」、碎けよ白玉。枯れよ初花。袖を濕す怨の露、一滴、二滴。雨に浴する海棠？

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

嵐に堪へぬ姫百合？
　重なる思は晴れ、微笑は蕾の唇を漏る。　春雨に遇ひし萎れ草、噫。　胸を傷めしは妄想？迷想？胡馬も北風にいなゝき、越鳥も南枝に巣くふ。　賢き君、敏き君、なぞて忘れ玉はん故郷を。　なぞて忘れ玉はん妾が身を。　情交は今、夏の日の紅葉、錦を飾る樂も瞬く間に、淸き胸の鏡、再び掩はれる迷の雲に。

　右評　文脈は未熟ですが想像には富んで居ます

(ロ)　鹿又松の（イハシロ）

樂しいも世の中悲しいも世の中苦しいも痛ましいもある浮世、實に是非ない次第です。　がりれらを貫通するの樂しみもなくはありません。　古き大杉の林、蟬のかまびすしくひゞく木の間、年至りて倒れたるもあり、いかめしげに立てるもある石碑のありさま。　其の多くの石の下には如何なる人の――あたら大望を懐きながら――行末を樂しみに思ひし可愛き子供を殘して若死した人もあるのでしやう。十五六年の娘と十二三許りの娘が彼方の一方にある石碑の前にひざまづき共うや〳〵しく手を合せて拜しました。

姉　竹さんお前あの阿母さんと三人でのおばゞさんの所へ往たとのあるのを覺へて御居で？

妹　あノ私の持て居る畫帳を無理に貰たと云ふ時のと？

姉　あアあの時はねェ竹さん

ふとふりむきて墓碑をながめ眼には涙をうかめました其れを妹にさとられまいと、そとのごひ

姉　やかましいねェあの蟬はあんなに鳴てよ、

妹　あゝいやだわ姉さんもなくの

と云ひ出した妹も、うるみ聲です

妹　姉さんは私に。泣たッて阿母さんは戻らない、それより、よく勉強してよい人になると阿母さんが、およろこびなさるのだと云ッたことがあッたに

姉　何も泣きはしない

妹　サア歸りましやう居ると尙々悲しくなりますから

二人互に、さとられまいと後になりてはふりかへり、ふりかへり見ては先になる殊勝さ

妹　姉さんはどうしても明日は學校へお歸りなさるの？

姉　ハイだから今の阿母さんの云ふことをよくきいて食物に氣をつけて御勉強なさいよ

妹　姉さんあのね今の阿母さんが、みとりは少し許りの病は

無理をするくせがあるから身体を弱くせねばよいがと仰しやつたことがありますから決してお無理をなさいますな

一室内に獨り机に向ひ手紙をくりかへし〳〵見て居るは十二三の束髮の娘

あア何ぜこんなに姉さんのお手紙がなつかしいの？昨夜の夢——先の阿母さんと三人で——われがまとであつたなら——なんだあんな夢と人に見せて

手紙を顔にあてゝ泣き臥しました

あア姉さんよ、何ぜ早くお戻りなさらないの、姉さんよ。

だつて卒業しないうちは

（八）

中村規矩平

アー愛情、さても心苦しきものかな。　人は樂しきものと云へり。　妾も亦然思ひしなり。　然るに今の妾は不圖彼の君を思ひそめてより、心凝り、氣鬱し。　平生の快活にも似ず、沈み深く。　平生の出精にも似ず、倦み易く。　机には倚れども、讀書は僅かにて思のみ多く。　裁縫は初むれども、手は靜まつて胸のみ騒ぐ。　親しき朋友の訪問、會ふさへも忌はしく、　母の土産に給ひたる京人形、見るさへも厭はし。風香る春の彌生、妾には冬籠の思、　月すめる秋の涼夜、妾には闇夜の思なり。　蓋し日の後日、月の後月、斷たず妾が身を支配するものは唯一の言ひ出し難き思のみ、——やるせなき思のみ。　膚身はなさぬ彼の君が撮影。せめては憂が中なる慰か。　否々却て斷ち難き絆なり。　此の絆にしばらるゝ妾がくるしさよ。　朝夕の化粧に鏡見れば、さまで顔色惡しきとは思はぬに、人より不快にやと問はるゝまでになりぬ。斯くても猶人の云へる如く妾が豫想せる如く樂みてふものあるべきや。　然り全く無きにはあらじ。　時たまに彼の君との會合。　彼の君が溢るゝ程愛嬌ある笑顏つくつて、妾に咄し懸け給ふ時の嬉しさ………。　彼の君が美妙なる而も情深き音聲は、妾が鼓膜を突き破つて、全身の總ての箇所にしみ渡るばかり………。　心は早や躍りくるへり………。否骨も肉も魂も一緒にとくるばかり。　彼の君が愛の熱の爲めに………亂れぬは唯視線——天も無く地も無く父母も無く兄妹も無き樣に一づに彼の君に注げる恍惚たる視線のみ。あゝ此の時の妾が樂しさ………。　如何なる能筆も、如何なる利口も恐らくは言ひ現はし得まじ。　妾自親すら、其量を測り得ぬ程なり。　されど是とても一時の樂、徒爾の事なり。　何となれば妾が思は之が爲のに更に數層の心苦しさ增

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

せばなり。　増すに隨つて氣も強くなりぬ。　膚氷る雪の朝格別の用も無きに、彼の君が出給ふと　知れば、運動と云ひて家出しぬ。　降りしきる五月雨の夕、常には隣家まですら夜あるきを厭ふ身が彼の君の家に行くことゝし聞けば、他事にかこつけても、淋しき野邊を越へてもきぬ。　されど彼の君に會ふことも得ず、聲音さへ聽き得ぬときの其失望……其落膽……、寧其憫れさは……。　あゝくりかへすら忌はし。　それのみか歸り路の心細さよ。　急く程雪深く風寒く、歩む丈路遠く雨はげし。　士卒失ひし敗軍の將落ち行く思も之には過まじ。　そのくせこりずまに幾度もすることの愚かさよ、會ふは稀にて憫なる歸のみ多きにも拘らず……。是も愛情の爲か。　アー愛情、さても恐しきもの哉。　或時は喜ばしめ、忽ち悲ましむ。　或時は奮起せしめ、忽落膽せしむ。　或時は多望ならしめ、忽失望ならしむ。　此末如何なるうき眼を見せんとする。　とは云へ世間の人悉皆嘘は云ふまじ。　妾か先の豫想、全くは違ふまじ。　されば妾が積る思も、いつしかとけて春の日の、長閑さ天を見ることもあらん。　樂しく長き日もあらん。　然りなくてやは。　妾が露の命も、たゞ此の希望の爲めに辛く續けるのみ。　あゝ慈愛なる愛の神よ、如何にせば此の思を遂し得ん………。否方法より寧ろ玄妙なる自在力を以て一日も早く此の切なる思をはらさせ給へ。　是ぞ妾が願ふる。　是ぞ妾が願なる。

以上無賞

第十三回懸賞文藝應募得點

題　桃の花

○唱歌

（イ）　紀　すみ（フクシマ）

やよひのあした野邊みわたせば　機れる門のかくれ家つゝむ　こずゑの花のさかりの桃に　菜の葉にあそし小蝶もとまる。　右評「機れる」が更に利きません。

朝日さしぬ、かすみも晴れぬ。　わら打つ門の　とまやをつゝむ　こずゑの花のさかりのもとに　塒をいでゝさへづるすゞめ。　右評「わら打つ」がやはり利きません。　前二首を引きくるめて評すれば春晝といふ題意です。

（ロ）　紅花逸史（イセ）

春の日ののどけき時にうるはしく　川邊に咲けるもゝの花
そのあざやかの姿とば（やさ姿）　水にうつせばまた底に
紅なせる一幹の　かげをまことゝ見まどひて　思はずすゝむる其すそを　水にぬらしておどろきぬ。　あゝ人々よ
人々よ、ふたゝびかへらぬ月日をば　のどかの春とは言ひ

ながら　あだに過ぐすな、色香をめでゝ。

右評　新しくもありませんが、水に映る意匠ハ優美です。

（ハ）　　　　　薔　てるを(ハルナ)

吹きくる東風はあたゝかく、　ときを得顔にうるはしく
さきいでにけり桃の花　いろかもいとゞゆたかなり。

以上四曲無賞

（ニ）　　　　　紅　涙　子(ハルナ)

みわたせば　今をさかりの桃の花　色はさくらに恥る（劣る）とも、　よし香ハさくらにもおとるとも（この句拔く）。
あぜ人は見捨てゝゆくず、この花を（なぜか見捨てゝ人ハ行く）。　あだにほこりて（咲きつゝ）あだに散り、　實の無きものに比ぶれば、　よもや劣りはせまじもの（さしも劣りはせぬものを）。　げにれもへ。　はじめあり、また終りある花は桃とも知れよかし。

右譯　結句ハ面白くありません。

（ホ）　　　　　綠松女子(ハルナ)

庭間に（庭の面に）咲ける（咲く）もゝの花、　ちとせを經れとかはりなく　時節たがハず（時をたがへず）咲きにはふ　花にこがれて舞ひあそぶ胡蝶の心ゆめうつゝ。

をしへのにはの桃の花、　今日も明日もと咲きだちて（さきいでゝ）學びの道ををしへつゝ　散りゆく身こそあはれなれ。

（ヘ）　　　　　盛野潤三郎(イロハ)

さくらのいろハ持たねども　うめのかをりハあらねども
ゆかしさよ　二十四番の花の中　しづかにゝほふ桃の花
あらそはで。

右評　意匠が平和です。

以上二曲いらつめ一部

（ト）　　　　　錦雲山人(ロゼ)

年々歳々花相似たり。　春し來ぬればわがやどの　桃のはなこそ咲きにけれ。　思へばこぞのいまごろは　殿もろともにうちつれて　むつましく見しあの花は（を）　蝶もたがへず訪ひくるに——日ごとにみえはかはるとも（すがたハよしや變はるとも）桃より（花より）わかきまごゝろを　それと知らでや吹くこちの　そよとも訪ハぬわがとのゝ　うたてくなりしず　うらみなる。

（チ）　　　　　孫筝女史(ミヽ)

ふるはるさめにさそはれつ、　さきみだれたる桃の花　くもかにしきか紅がすみ（あさげの風にわなゝけば）　いゝしたゝ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

い
るつゆもにはふなり。

春興（韻文）　撫箏女史

はるさめに　咲く　はなの　まさかり
　かすみも　にほひ、　そらも　いろづく。
きぬに　やどる　香（か）　いへごとに　せむ、
　たをれば　そむく　ただの　こゝろに。

右は懸賞文として寄せられた作ですが、都合により審査以外として題を更めました。

とのさま（韻文）　掬月散史

一

きしの　さくらの　花　ちりて
　水の　まに〳〵　にし　ひがし
よるべ　なぎさに　うかぶらむ、
　さだめ　なき　身の　うへに　似て。

二

葉ずゑの　つゆか、　ほたる火　か、
　水ぎは‖づたひ　とひ‖くれば、
ひかりれ、　いつか　きえ‖うせぬ、
　こひしき　人の　かげに　似て。

三

つきの　ひかりを　たのみにて
　まだ　よみ‖はてぬ　たまづさに
やみを　のこして　夜（よ）は　ふけぬ、
　おちき　無き　世の　さまに　似て。

四

朝日は　たかく　のぼれども、
　こずの　かたみや　しらゆきの
つもる　おもひは　とけ‖やらず
　たのみ　少なき　こひに　似て。

評　近ごろ世にめづらしい優美な御作、日本韻文の將來が次第にたのもしく爲りまそ。

星（英詩和譯）　朧月

一

かゞやける　星！　汝（な）は　なにものぞ？
天（そら）の　上（うへ）なる　夜光の　たま　か？

二

かゞやく　日　いり、　つゆ　くだる　とき、

なれは きらめく、 よすがら ながく。

三

いと くらき 夜に なれ てらさずば
われは まよはむ、 行くべき みちに。

四

日の のぼる まで 汝(なれ) ねむらねば、
わが ねむる まも まど より のぞく。

月の瀬に梅を觀る

笹川はる子

頃は、二月廿七の事でした、妾は、父母と共に、早朝に新田を發して、午前十一時半に、月が瀬村、字、尾山と、云ふ所へ、着しました、(尾山と云ふは、月瀨と、川を隔てゝ、相向ひの山なり、)。見渡せば、月瀨山、一流の川を、中央にして、鮮にて、居ます。そして、梅花は、山一面に、在つて、遠くから、之を望めば、霞か雲か、近づいて、見れば、芳香馥郁として、鼻を穿つ、實に絶景、日本第一とも言ひたいほどです。妾共は、少(しば)らく、此景色を熟視(ながめ)て、居ましたが、「此度は月瀬の方を見やう」、と父母の言葉に、同意して、終に、月瀬の方へ趣きました。 此所には、渡船が有つて、(尾山より月瀬へ渡る所、) 下を流るゝは、名張川の下流、名を皐月川と呼びます。 其れより、川を渡つて、上陸し、今居た尾山の方を見れば、今迄該山の事は、少しも、知りませんでしたが、花は月瀨に劣らず、却つて、妾共の、見た所では、多い位ぬ、一目千本、見返り千本とか、稱へて、澤山集つて咲いて居ます。 其間から淡し相に、首を出して、居るは、數本の杉の木、余り梅許りでは、興が有りませんが、間々に、杉が有るは、猶は面白みが有つて、一層美を增します。

月の瀬や梅が香したふ鳥のこゑ

其内に、知らず〳〵、二三町も、歩いて來ました。 すると、此度は、中々今の樣な者では有りません、まア、梅の有る事、〳〵、〳〵、實に、妾共をして、先きよりも、一層驚かせました。 妾は、余り花が多く有りましたから、土地の或る人に、尋ねました。 聞けば、其れも其筈、之れは一目萬本と稱へる所ですと。
其日は、降雪の翌々日でしたから、所々に、殘る者は、雪、其れさへも、花の香が移つて居て、一層美を爲して居ました。

月の瀬や谷間に殘る雪さへも
花と見違(まが)ふ景(さま)ぞ麗(うる)はし。

幼時から、頼山陽氏の、賞せられたと云ふ事は、聞いて居ましたが皐月川を隔てみ、向ふの山を見る所等は、中々、妾等の、拙ない筆の、及ぶ所では、有りません、只絶景と云ふの外は、有りません。
兎角して、居る内、日は漸々、西へ傾いて來ました、妾共は歸家の、おそく成るを恐れて、終に、其れより新田なる、吾が家へ歸りました。
之れは、有名なる、大和國添上郡月瀨村の事です。

右れ笹川はる子令嬢が月瀨を實見され、その實景を添へ且そこで賣つて居る梅林の圖まで添へて御深切に送つて下さつたのです。こゝに笹川令嬢に向つて厚く御禮を言ひ、併せて同令娘の記文を以て名勝の樣子を他のいらつめ方へも御知らせします。………いらつめ記者

〇懸賞文藝新題

〇第十八回題（何でもよし）　四月十日〆切
右　いとまごひ

〇第十九回題（何でもよし）　四月二十日〆切
右　若葉かげの假り寐

〇第二十回題（何でもよし）　五月十日〆切
右　初夏の鐘

〇第廿一回題（何でもよし）　五月廿日〆切
右　老女杜鵑を聞く

〇第廿二回題（唱歌文章に限る）　六月十日〆切
右　梅雨窓前に香を焚く

〇第廿三回題（唱歌に限る）　六月廿日〆切
右　午睡美人

〇第廿四回題（唱歌文章に限る）　七月十日〆切
右　採蓮女

〇第廿五回題（何でもよし）　七月廿日〆切
右　盆燈籠

近頃應募者の中に應募規則に背くものが有りますが是から其作の巧拙に關せず犯則は容赦なく審査外にします

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを倘ぶ事〇第二　唱歌淨瑠璃及び文章は各一千五百字以內の事〇第三　一人で二種類の作を投せられた人は一種類各別々の紙に書く事〇第四　原稿には宿所姓名明記の事〇第五　原稿は半紙に限る事〇第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。賞品は一等賞淸親・皃信二氏の內御好みの書家の手に成つた書帖だけの大さの肉筆着色絹地書一面〇二等いらつめ十二部〇三等三部。

花兄弟二枝梅香、

立花家かをる作

序幕

場割　淺草觀音堂前の場　月瀨庭先の場　同塀外の場

役割〇月瀨梅子〇同春雄〇下女御常〇惡待酒尾杉大夫〇同赤井貫藏〇男達涙花梅吉〇小分香太〇難波大作〇老母白妙〇茶屋娘御山〇仕出若干

本舞臺一面の平舞臺、向正面二王門の道具、後ろ觀音堂の書割、上手葭簀張りの茶店茶道具宜しく、舞臺に床几二脚を並べ、都て淺草觀音二王門前の摸樣宜しく、こゝに思ひ〳〵の仕出腰を掛け、茶店娘阿山島田かづら前垂掛やつしなりにて茶を出して居る。此見得流行唄へ雙盤の鳴物を冠せ、賑かに幕開く。仕出は思ひ〳〵の捨臺詞あつて門の內へ這入る。

山　やれ〳〵今日のやうに急がしいことはない。夫れはさうと毎日御參詣になる御孃樣はどうなさつたか。〇ト向を見て

風評をすれば影とやら向から御出になつたれ御孃樣、ても御美しいことぢやなア。

ト茶碗を片付て居る。雙盤の鳴物キッパリとなり、向より月瀨梅子文金島田かつら振袖、草履をはき、上品なる娘にて來で來り、直に舞臺に掛る。

山　これは〳〵御孃樣、今日は大層御ゆつくりの御參詣でムり升したな。

梅　さい、なア少し邸に用事があり、夫れで晩ふなりました。

山 どれ御參詣を致しまーやう。
左樣なれば御歸を御まち申ーます。
梅子は阿山にあいさつ有つて右の鳴物にて門の內へ這入
ると上手より赤井貫藏、酒尾杉太夫、袴羽織二本差侍
にて瓢簞をさげ、大部醉つたる仕打にてひよろ〳〵出で
來り床几に腰を掛ける。　阿山は彌氣味惡き仕打にて
もぢ〳〵する。
貫 あい女何故天下の御直參に茶を出さぬ。
杉 醉つたと思つて無禮をすると許さぬぞ。
山 只今差上げます。　大層御機嫌で厶んするア。
杉 梅見の歸で大部酩酊いたした。
山 それは〳〵御樂みで厶んーた。　〇ト阿山は茶を汲み、盆
に載せ、
さゝ召上りませ。　〇ト茶を出す。　貫藏ハ阿山の手を握り、
貫 いや可愛い者ぢや。　〇ト引き寄せる。　阿山はびッくり
ーて
山 ほゝまア惡い御笑談〇ト振り拂つて葭簀の中に這入る。
杉 はゝゝゝ色氣のない奴ぢや。　〇ト瓢簞をふり
いや未だ大部酒の有る樣子、此處で飲むも亦一興〇ト茶碗
に汲んでぐッと飲み貫藏にさす。
貫 これハ失敬。　然し貴殿の御酌でハどうも酒が旨く厶らん
て。

杉 これハ〳〵痛み入つた御あいさつ。
貫 だが酌はとかく女に限るではムらぬか。　こりや女中鼓へ
來て酌をしろ。
山 私は御酌ハ出來ません。
ト つんとすまーて居る。　此時門の內より以前の梅子出
來り、二人を一寸見て足早に花路に行き掛る。　二人ハ
之を見つけ、
杉貫 娘子暫く御待ち下され。
これにて梅子ハとんだ者に呼れたと云ふ思入れにて腰を
屈め、
梅 誰何樣かは存じませぬが、歸りを急ぎますればどうぞこれ
にて。
貫 あいや御手間はとらせぬ。　これへ〳〵。
梅 ぢやと申ーて。　〇ト當惑の仕打。
貫杉 はてまア御出なされと申すに。
ト二人ハづか〳〵花路まで行き、無理に梅子を舞臺に連
れ來り、二人共に見取れたる仕打。
貫 ても美しいわ〳〵わ。　沈魚落厂閉花羞月。
杉 秀佳娘で厶るゐ。　さゝこれに御掛けなされ。
梅 難有うはムりますが、ちと歸りを急ぎますればどうぞこれ
にて御免下されませ。
貫 それでハ餘りにあつけゐいと申すもの。
杉 こゝに御座つて一杯召上りませ。

梅 でも無調法でムりますれば。

貫 左様なれば酌をなされ

　ト茶碗をさしつける。梅子ハ始終困つたと云ふ思入にて下を向いて居る阿山も色々心配の仕打、

これさ無言つて居るは御不承知か。

杉 一体武士たる者が差したる盃を何故あつて受けられぬか。刀の手前是非飲ませる。

貫 これさ〳〵酒尾殿、左様な野暮ハ申さぬもの。情は武士のならひでムるて。のう御娘身共の酌をして下され。

　ト貫藏は段々梅子により添ひ、抱き付うとする。梅子ハびつくり飛びのく。此のとたんはづみにて貫藏の持つて居る茶碗とんで杉太夫の胸に當る。杉太夫は立腹の仕打にて、

杉 これやい武士たる者に拋げ打を致したな。もう量見が相成らん。夫れへ直れ眞二ッ。

梅 これはしたり、此方の御方が私に無体な事を爲さる故

貫 こいつが〳〵身共の知つた事ではムらぬ。悪くい女め。

杉 かゝる無禮を働くからは邸へ連れ行き存分にする。

貫 女め、立て

　ト無理に二人は引立てやうとする。阿山は色々詫びるを聴き入れず、二人はいやらしき仕打色々ある。梅子は始終誰れか來ればよいと云ふ思入にて、

梅 あれ〳〵○ト逃廻る。此時鳴物きつぱりとなり、向より濱花梅吉羽織着流し一本差し、駒下駄をはき、男達にて香太好の拵へ小分を供に連れ來り、直に足早に舞臺に來り、二人をなげのけ、梅子をかばつてきつとなる。二人は起上り、びッくり仕打。

貫 己れ素町人の分際で。○ト腰の痛む仕打にてあいたゝゝ。

杉 よくも武士をあいたゝゝゝ兩人拋げをつたなア。

　ト二人は刀のつかに手を掛けるを梅吉はきつと留め、

吉 御堂前をも憚らず婦人に對してとやかくと無体の戀慕、煩悩の犬侍か此方衆二人こゝらあたりの料理家の裏へ廻つて尾を低れ魚の骨でもゝらはつしやい。

　ト突き放す。

貫 こいつが〳〵無禮うちだ。

杉 覺悟しろ。○ト刀を拔きて切つて掛るを身をかはし雙方の腕をねぢ上げ、

吉 鈍刀に其の腕で切られるものなら切つて見ろ。○トきつと見得。

　香太は思入あつて笑ひながら

香 御武家さん大概によしにしなさい。兄さんに逢てはとても駄目だ。首の飛ばねェ前に謝つて仕舞ひねェ。

兩人 餘計なこと申すな。

　ト二人は切ッて掛る。早めの合方になり、梅吉は手の

きいたる立廻りあつて二人を散々に胸撃にする。　二人は協はぬ思入れにて。

杉　やれ〳〵何卒許るして下され。

貫　背中の骨がばら〳〵

杉　一刀流の達人なる我々二人を打据ゑた貴殿は天狗か、

貫　鬼夜刃か、恐れ入つたる今の腕前。

兩人　して貴殿の御姓名は。　○トあきれたる仕打、梅吉は思入あツて、

梅　さ、口幅てい云草だが、花の御江戸の花川戸番隨院の親分の跡をしたつて立引の負るが嫌ひ江戸兒の氣性も春の魁に邪魔立をする雪霜を排つて開く一枝に勝色見せる色も香も生田森に景秀が後へはひかぬ二度のかけ、喧嘩と聞けば眞先に勇んで飛びこむ飛梅の天神様の縁日にもふりも丁度二十五の蕾も御代の春風に浪花津ならぬ浪花町住んだ所が名となつて咲く此花や浪花の梅吉○ト思入れにて云ふ。　香太いぞ〳〵悦び、

香　成田屋ア。

杉　さては貴殿は名の高い、

貫　梅吉殿でムつたか。

杉　さうとは知らず無禮の段々、

貫　眞平御免被下度し。

吉　再び彼様な儀もあらば其時こそハ許さぬぞ。

香　足下の明るいうち早く歸らつしやい。

杉　えゝ行くなと云つても今行くわい。

貫　無禮者め。　○ト香太ヲ睨め二人ハいま〳〵しき仕打にて刀を室に入れ、

二人　左様ムれば梅吉殿、

吉　以來はきつとつゝしまツせい。

二人　とは云へ此儘○トいき込む

吉　ドうしたい。

杉　なアお觀音堂のことなれば、

貫　大悲大慈の御情けお、

杉　これで二人は放生會。

貫　四間四面の大兵の二人の者が此の様に

杉　一寸八分の小男に五重の塔の重々と、

貫　痛い目に逢ふ有様ハ

杉　とんだ似合の生人形○ト花路の方へ行きながら口惜き思入にて、

兩人　思へば〳〵武士たる者が○ト梅吉ト顔見合せ、氣を替へ、

杉　長居ハ恐れ○ト貫造を引張る。　これと合圖に見世物の鳴物なる。

さア敵入やい。

兩人　評番ちや〳〵あと二人ハ可笑味あつて向へ這入る。　梅吉は跡見送り

（つゞく）